

2019. 10. 9 (水)

理想と現実の矛盾を引き受けて挑戦すること

鈴木 謙 介

宮沢賢治作品に見る「焼身願望」

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です

有名な宮沢賢治の『春と修羅』という詩の書き出しの一節です。

「わたくし」という存在を「現象」ととらえて、心の中の問題ではなく、電燈が灯るような現象としてとらえるというのが社会学の自己の考え方の特徴だという話は、もしかするとどこかの授業で聞いたことがあるかもしれませんが。

きょうは、その宮沢賢治という作家、詩人について書かれた、私の師匠の師匠に当たる見田宗介の『宮沢賢治－存在の祭りの中へ』という本を下敷きに、彼の足跡を追いながら社会学とその考え方、その背後にあるものを追いつつ、「私にとっての Mastery for Service」というテーマに迫っていきたいと思っています。

きょう、宮沢賢治の話をするると何人かの人に話しましたら、読んだ覚えがないという人がたくさんいましたので、そんなにマニアックな作品の話をするつもりはないのですが、知っている人は知っているとおり、宮沢賢治

の作品の中には自分の身を焼き尽くすほどの思いにかられた存在がたくさん出てきます。例えば『よだかの星』や『グスコブドリの伝記』など、よく知られているもので言いますと『銀河鉄道の夜』という作品の中に出てくるさそりの話が有名です。引用して読んでみましょう。

むかしのバルドラの野原に一びきの蝸がゐて小さな虫やなんか殺してたべて生きてゐたんですって。するとある日いたちに見附かって食べられさうになつたんですって。さそりは一生けん命遁げて逃げたけどうたういたちを押へられさうになつたわ、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたといふの、あゝ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうたうこんなになつてしまつた。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちにと呉れてやらなかつたらう。そしたらいたちも一日生

きのびたらうに、どうか神さま、私の心をござん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。って云ったといふの。そしたらいつか蠍はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよのやみを照らしてゐるのを見たって。

これはさそり座のアンタレスという星のことをエピソードとして童話風に描いたものだと言われていますが、特徴的なところがいくつかあります。

ひとつは先ほど言った、「身を焼き尽くすほどの思い」、つまり焼身願望です。自分の身を燃やすことで人のために尽くしたいという奉仕の心です。ただ、ここにはもうひとつ、社会学的に大事なポイントがあります。ここでは「まっ赤なうつくしい火になって燃えてよのやみを照らしてゐるのを見た」とあります。ただ単に燃えている自分を見たのではないのです。燃えている自分が誰かの役に立っている姿を見た、つまり私がどのように見られているかを、さそりが自覚したと書いてあるのです。

社会学の考える自己のあり方が、ここにはよく現れています。心の中や脳の中ではなくて、私と私を見ている他者との間にいるのが自己である、そういう関係性の中で自己というものが作られるのだと考えるのが社会学の特徴です。ですから自分がどのように見られていると認識するかということが自分の存在に大きな影響を与えます。

宮沢賢治という人は、実はこの「私がどう見られるか」ということと「私がどうありたいか」ということの矛盾に苦しんだ人でし

た。あまり知られていないかもしれないのですが、宮沢賢治は岩手県、古着屋と質屋を営んでいるとても裕福な家の生まれなのです。しかも古着屋で質屋ですので、近所の貧しい農家の人がなけなしの着物を持ってきて、その着物をお金に替えて、それで商売をしていた。いわば貧しい農家の人たちが搾取して生きているという家だったわけです。

賢治は幼少のころからそういう自分の家の環境が嫌いでした。人から搾取してまで、人のことを踏みつけてまで幸せになる、豊かになるような生き方はしたくないというので、自分の家のことが嫌だったのです。ところが周りからはどう見られるかと言いますと、小作人を何人も抱える地主の家の跡取り息子でお金持ち。学校に来たお父さんが高価な銀時計を周囲にわざわざ見せつけるという、金持ちであることが周りからははっきりわかってしまう環境の中に生きていました。つまり、「理想の自分」と「見られる自分」の間に、矛盾を抱えていたのですね。

しかもそういうとき、子どもとしては親に反抗したくなるものなのですが、賢治はもともと病弱だったので、小さいころから何度か大きな病気をしています。結果的にお父さんの献身的な看病のおかげで回復しているのですが、その看病をする際にお父さんにその病気がうつってお父さんは生涯後遺症に苦しんだりするのです。

つまり賢治は、汚いお金で裕福に暮らし、そのお金で培った家に住み、そんな商売をしている親が嫌いだと思っていてもその親のおかげで生きていられるという、自己存在の根本的な矛盾を抱えていたのです。自分の理想の生き方を貫こうとすれば親のことや家のことを否定しなければいけないのですが、それ

を否定すると、同時に自分の存在自体も否定されてしまう、そういう矛盾の中に生きていたわけですよ。

その負い目ゆえに賢治は自分のような汚い存在、人から搾取する存在は消えてしまえばいいという思いと、自分が人のために役に立ちたいという思いとの矛盾を抱えながら生きていました。それがひとつの形に結実するのが最初に述べた焼身願望です。この身なんか焼き尽くされてしまえばいい、そしてそのことによって人の役に立つ存在になれるといい、そういう願望の現れなのです。

みじめな現実に打ちひしがれる

実は、見田宗介の評伝の中では、そうした自己否定から始まって焼身願望という形に結実するもの、自分などいなくなってしまえばいいという存在が、最終的に世界の美しさ——これを彼は「存在の祭り」と言っていますが——に触れることで、現実の世界に帰っていくという話をしています。

きょうはそのお話は詳しくできませんが、一節だけ「過去情炎」という詩の一部を読んで見たいと思います。

なにもかもみんなたよりなく
 なにもかもみんなあてにならない
 これらげんしやうのせかいのなかで
 そのたよりない性質が
 こんなきれいな露になつたり
 いげれたちひさなまゆみの木を
 紅べにからやさしい月光いるまで
 豪奢な織物に染めたりする

「自然というものはただあるだけで美しい、

そして私というものはただいだけで汚い」という世界の対比の中で、自然の美しさ、世界の美しさに感化されて、賢治作品の主人公は現実の世界に降りてくるのです。その現実の世界との関わりは、宮沢賢治の生涯の活動の中では、社会奉仕活動として現れます。

賢治は青年期から法華経という宗教に傾倒していました。あるとき親に黙って東京に出て行きまして、国社会という右翼系の宗教団体の宗教活動に参加しようとするのですが、君の仕事はないと言われて追い返されるなど、世の中の役に立ちたいと思って何かしようとするものの、失敗することを繰り返します。

その後、東京で活動しているときに最愛の妹が病に倒れたという知らせを受けて地元の岩手に帰り、農業学校の先生になりました。先生を何年か続けながら、農民の人たちにこういうふうにするのと農作物がよく育つということ教える仕事に就くのですが、農家としての理想の生き方を説いているのに、自分はそのうのと月給暮らしをしているという矛盾にまたも直面してしまいまして、最終的には農学校も辞めてしまうのです。

つまり、自分がこうありたいと思うことと、そのありたい自分を支えている現実の矛盾に常に苦しんで、その中で何か現実的にできることはないかと探し続けていたのが宮沢賢治という人だったのです。

非常に真摯な姿勢だと思えますよね。今日の話をお聴かされた方の中には、Mastery for Service を、宮沢賢治のように世の中の役に立とうと願って、そのために努力することを言うのかと思うかもしれませんが、でも、実はそうではないという話をしたいのです。

晩年、月給暮らしが嫌になって農学校を辞

めた宮沢賢治は羅須地人協会というものを立ち上げまして、地域の農民の生活改善運動に乗り出します。具体的には農家の人たちに種を配るといった活動をするのですが、自分自身はとても質素で、持たず、求めずという非常に貧しい暮らしをすることになります。その活動を数年間続けた後、ろくに栄養のあるものも食べていないので病に倒れてしまうのです。病に倒れるということは、あれだけ嫌だった実家の世話になることになるのです。一度出ていった実家に戻って、家の金で看病されている状況で、いつまでも親の世話になっているわけにはいかない、活動ができなくてごめんなさいといった内容の手紙を当時の人たちに書いています。

そんな宮沢賢治が病で何もすることができない中、亡くなる2年前に手帳にある言葉を書きつけています。

雨ニモマケズ
 風ニモマケズ
 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
 丈夫ナカラダヲモチ
 慾ハナク
 決シテ曠ラス
 イツモシヅカニワラッテヤル

「雨ニモマケズ」という詩として皆さん知っていると思いますけれども、ここまでのエピソードを聞くと印象が変わりませんか。皆さんはこの詩を道徳の時間に聞いたかもしれません。でも、道徳について説いた詩ではないのです。こういう生き方をしたいと思って始めた活動を病弱ゆえに継続できず、結局は人の世話になってしまった。そんな状況で書かれた詩だと思えば、「サウイフモノニワタ

シハナリタイ」という言葉の意味も、まったく違うものになります。

見田宗介はこの詩について、「途中で倒れた登山家が、再度のアタックのためのじぶんの装備目録を、最低限必要なもののリストを、周到綿密に点検して自分の手帳に記入している態度に似ている」と言っています。なるほどという気がします。

矛盾を引き受けて挑戦を続ける

きょうお話をしてきました宮沢賢治という人の一生の中で抱えていた矛盾、本当はこうありたい自分と、そして、にもかからず現実にはちっともそんなことのない自分。それは私たちの生きている姿と重なりませんか。私自身、こうやって偉そうなことを言いつつ月給暮らしをしているわけですし、その月給は皆さんのお父さん、お母さんが一生懸命働いて稼いで納入した学費の中から出ているのです。

皆さんもそうかもしれません。入学する前には「こんなことをしたいです」と大それた志望動機を語っていたかもしれません。大学案内を見ながら、あれもしたい、これもしたい、こんな単位も取りたいと言っていたかもしれません。でも現実にふたを開けてみると「1限はダルいから飛ばわ」「楽単は何？」という話しかせず、親から金を出してもらっているにもかかわらず、「あなた、きょうも遊びに行くの？」と言われて、「別にええやん」みたいなことを言ってしまう自分。まさに自分がこうありたいと思っていることと現実人に食わしてもらっているに過ぎない、理想を何ひとつ実現できていない自分、まさに今の私たちそのものかもしれないと思うわけで

す。

先ほど「地の塩、世の光」という聖書の一節を引用していただきました。「あなた方は地の塩であり、世の光である」。「である」と言います。「何々になる」ではないのです。「あなた方はもともと地の塩であり世の光ですよ」と言っているのです。もともと地の塩であり世の光である存在、しかしながら実際に何かをしようとする、大それた理想を現実のものにできない存在。それも含めて「である」です。果たして私たちはどのようにその矛盾と向き合っていくべきなのか。

『銀河鉄道の夜』の中で、カンパネルラと旅を続けたジョバンニですが、2人でどこまでも行こうねと言っていたのに、そのカンパネルラがあるときふといなくなってしまいます。現実の世界に戻ってみると、そのカンパネルラがザネリという友だちを助けておぼれて死んでしまったということを知るわけです。

実は『銀河鉄道の夜』にはいくつかの版があって、初期の版では、カンパネルラがいなくなってから現実の世界に戻るまでの間に、「ブルカニロ博士」と会話するシーンが挟まれています。そこで博士はジョバンニに、科学の発展について説くのです。

おまえはおまえの切符をしっかりとっておいで。そしてしんに勉強しなけあいけない。おまえは化学をならったろう、水は酸素と水素からできているということを知っている。いまはたれだってそれを疑やしない。実験してみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできていると言ったり、水銀と硫黄でできていると言ったりいろ

いろ議論したのだ。みんながめいめいじぶんの神さまがほんとうの神さまだというだろう、けれどもお互いほかの神さまを信ずる人たちのしたことで涙がこぼれるだろう。それからぼくたちの心がいとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれども、もしおまえがほんとうに勉強して実験でちゃんとほんとうの考えと、うその考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、もう信仰も化学と同じようになる。

後の版では削除される部分ですから、賢治の伝えたかったこととは違うのかもしれませんが、けれど、ジョバンニが「僕はもうあのさそりのやうにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」と言っていることとあわせて考えると、これはやはり大事なことのようになっています。というのも、「百ぺん灼いても」というからには、何度も繰り返して挑戦するというニュアンスが含まれるからです。

科学が発展してきた歴史においては、現在では間違いだと分かっていることが真実だと思われていた時代もありました。そのことによって命を落とした人も大勢いました。けれども科学のあくなき探求によって、少しずつその間違いを正してきたのです。

それと同じで、私たちは、よく間違いを犯します。大きな理想を抱いても、間違った見方や凝り固まった信念から、理想とは逆の方向に進んでしまうこともあります。でも同時にそこでは、誰かのためになることをしたい、人によるこぼれることをしたいという気持ちも、確かにあるわけです。

Mastery for Service における「Mastery」、つまり「練達」とは、なにかに習熟しているということです。習熟する過程とは、「できない」が「できる」に変わることです。ということは「できない自分」と「できる自分」の矛盾を直視し、それを乗り越えるために何度も挑戦することからしか、習熟への道は開けないのです。矛盾を抱えた恥ずかしい存在でありながら、それでも世を照らす「光である」ということ。ここには、そんな挑戦を続ける姿勢を、感じ取ることができるように思います。

きょうは Mastery for Service という本
当にいろいろな解釈の可能な言葉を、これが
正解だということではなくて、私の観点から
見たときに、ちょうど社会学の本で面白い本
がありましたので、その話とつなぎながら紹
介をさせていただきました。

朝からお集まりいただいてありがとうございました。

※宮沢賢治作品の引用は、青空文庫による。
(社会学部准教授)